

学校行事における振り返りムービーの可能性 —学級・学年の連帯感を高めるために—

市 河 大 (文教大学教育研究所客員研究員)

今 田 晃 一 (文教大学教育学部)

Potential of *Furikaeri* Movie (album in which videos of past events are recorded) in School Events -For the Purpose of Enhancement of Sense of Solidarity among Students in the Same Class or Grade-

ICHIKAWA DAI, IMADA KOICHI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)
(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

2020年完全実施予定の学習指導要領において「アクティブ・ラーニング」が注目される中、その具体的な指導の方法が求められている。アクティブ・ラーニングは全教育活動で指導されるべきであり、特別活動「学校行事」においても効果的な方法を模索したい。そこで本研究では、学校行事での実践を通じて「学校行事における振り返りムービーの可能性」を検討するとともに、アクティブ・ラーニングの具体的な指導の方法の可能性を検討した。

1. 問題と目的

(1) 学習指導要領と21世紀型能力

子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業そのものが大きく変化する可能性がある¹⁾。それらの現状を踏まえて、平成27年3月に一部改訂された学習指導要領が告示された²⁾。

道徳の教科化や外国語活動の実施学年の増加などの教育内容の主な事項として挙げられる。

また国立教育政策研究は、OECD (Organisation for Economic Co-operation and Development) のキー・コンピテンシーと21世紀型スキルを踏まえて、2013年に「21世紀型能力³⁾」を示している(図1)。21世紀型能力は、「思考力」、「基礎力」、「実践力」の3つから構成され、「21世紀を生き抜く力

をもった市民」である日本人を育成し、自立、協働、創造を軸とした生涯学習社会を実現することを目指している。

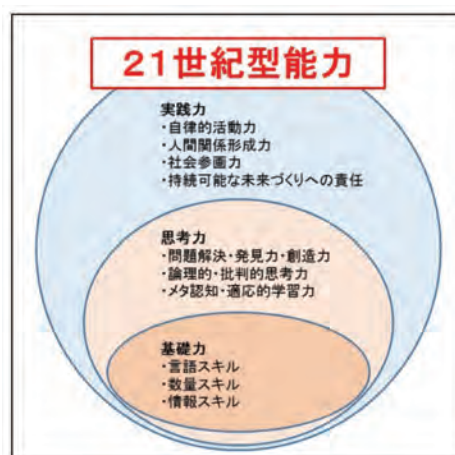


図1 21世紀型能力のイメージ図

(国立教育政策研究提示)

21世紀に生きる子どもに必要なとされる能力とは人の話をよく聞き、自分の考えを適切な言葉で相手に伝えるコミュニケーション能力であり、新たな問題を発見し、既存の知識では解決できない問題を文化や生活環境が異なる人と解決していくことが問題解決能力である⁴⁾。

(2) アクティブ・ラーニングの充実とICT活用

今後、文部科学省は、2016年度に全面改訂、2020年度本年度実施される予定の次期学習指導要領について、子どもが課題に対して主体的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」を提唱した。アクティブ・ラーニングは知識基盤社会への対応といった視点で受動的な学びから能動的な学びへの期待ができる⁵⁾。

21世紀に生きる子どもに必要な資質を育成するために、アクティブ・ラーニングを重要な学習活動と認識し、現行学習指導要領で示されている言語活動や探求的な学習活動、社会とのつながりをより意識した体験的な活動等の成果やICTを活用した指導等を踏まえつつ、具体的な教育活動を行う必要がある。文部科学省が教育内容だけでなく、アクティブ・ラーニングという方法について言及したことは初めてであり、その重要性がうかがえる。

アクティブ・ラーニングは「教員による講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習方法の総称」と定義されている⁶⁾。学修者が能動的に学修することによって、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めて汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる。ある事柄を知っているのみならず、実社会や実生活の中で知識・技能を活用しながら、自ら課題を発見し、主体的・協働的に探究し、成果等を表現していけるよう、学びの質や深まり

を重視しアクティブ・ラーニングやそのための基本的な指導の方法の確立が急務であるとしている。

ただ、筆者らはこれらアクティブ・ラーニングについての記述を検討するにつけ、最終的には今までも取り組んできた「言語活動の充実」をさらに新しい視点で再構築し、より充実させるものであるととらえている。もちろんアクティブ・ラーニングでは、ダイナミックな学習活動が求められているが、活動だけでなく、活動したことを思考力・判断力・表現力を駆使して、言語活動の視点から適切に自身の活動を振り返ることが大切である。

さらに従来の「言語活動」を教育ICT等を活用するなどの新しい動向（学びのイノベーション：教育の情報化ビジョンより）に留意しながら進めることを示唆していると読み取れる。このような具体的な提案は文部科学省の立場とするものではないであろうが、アクティブ・ラーニングに関する様々な言説より筆者らはその有効活用についても研究目的としてとらえている。

(3) 特別活動「学校行事」

一方、学習指導要領では、全教育活動を通じて「生きる力」を育成するべきと示している。それは「生きる力」に準じる21世紀型能力の育成やそれらを育成するアクティブ・ラーニングでの指導も全教育活動で行うことである。

つまり各教科や道徳、総合的な学習の時間の授業だけでなく、特別活動においても行うべきである。「生きる力」を育むためには、多様な集団による活動を計画的に実践することができ、「なすことによって学ぶ」という方法原理によって体験的に学習の深化を図ることができる特別活動が一層重視されることは確実である⁷⁾。特別活動とは、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の教育課程に設けられた領域で、21世紀型能力を育成

する上では重要な役割を担っている。

中学校における特別活動の目標は、中学校学習指導要領において以下のように示されている（表1）。

表1 中学校の特別活動の目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

さらに中学校の特別活動は「学級活動」、「生徒会活動」、「学校行事」の3つの内容からなるとされている。特に学校行事は親や教員以外の地域の大人や異年齢の児童や生徒との交流、自然の中での集団宿泊活動や職場や体験活動、奉仕体験活動など体験活動を多く取り入れることができる。現行の学習指導要領では体験活動の重要性をより一層明確にしてあり、新たな学習指導要領においても同様であると考えられる。中学校における学校行事の目標は、中学校学習指導要領において以下のように示されている（表2）。

表2 中学校の学校行事の目標

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。行事の成功が普段の授業への意欲や集団としての連帯感が集まり、学校生活を豊かにすることができる。

学校行事は、全校または学年を単位とし、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に役立つ体験的活動である⁸⁾。学校・

学年が一体となる学校行事は生徒が自主的・協働的に行う教育活動であり、まさにアクティブ・ラーニングだと考えられる。同じ目標や時間、場所で過ごすし、共に課題を解決していくことで、集団としての連帯感が高まり、集団活動においても効果を発揮することができる。中学校の学校行事の内容は「儀式的行事」、「文化的行事」、「健康安全・体育的行事」、「旅行・集団宿泊的行事」、「勤労生産・奉仕的行事」の5つの内容からなるとされている（表3）。

表3 中学校の学校行事の内容

(1) 儀式的行事

学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行うこと。

(2) 文化的行事

平素の学習活動の成果を発表し、その向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しんだりするような活動を行うこと。

(3) 健康安全・体育的行事

心身の健全な発達や健康の保持増進などについての理解を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行うこと。

(4) 旅行・集団宿泊的行事

平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。

(5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、

ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。

学校行事においては、学級や学年といった深く関わり合う同年齢集団が全体で発表を行ったり、他集団と対抗して競いあったりするなど、自身の集団を意識する場が意図的に設定している。そのことから生徒はその集団で期待される模範的な行動を行おうとする、学級や学年の中で自分の立ち位置を意識することが促される可能性がある⁹⁾。学校行事を通して、集団での自己有用感や自己存在感を高めることが期待でき、生徒が主体的に作り上げることで、自己肯定感や達成感を味わうことができる。

学校行事の実施については、学校や地域及び生徒の実態に応じて、各種類ごとに、行事及びその内容を重点化するとともに、行事間の関連や統合を図るなど精選することが重要である。また、実施に当たっては、幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合い、自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫することが必要である。学校行事はその場限りの活動で終わらせるのではなく、事前・事後の学習活動の工夫が必要である¹⁰⁾。

しかし、授業時数が厳しいことからの多くの学習活動を行うことが難しいのが現状である。特に事後学習については、授業や次の学校行事に教員が追われることになり、生徒は終わったという感情だけが残るだけである。教員の役割は、その体験を通して、生徒自身が何を感じ、どのように考え、いかなる変化を引き起こしたかを明確にすることである¹¹⁾。

そこで本研究では、実践を通じて学校行事における動画や写真の振り返り（以下、振り返りムービーと称す）による、学校行事の効果的な事後学習の在り方を考察することを目

的としている。これらは先に述べた本研究の目的であるアクティブ・ラーニングおよびそのICTを活用した振り返りの在り方に関する研究としての取り組みである。

以下に、本研究で取り組んだ3つ学校行事での実践を通じて見出した知見を中心に報告する。

2. 方法

実践は、埼玉県越谷市立栄進中学校において行った。大規模校であるため実施については学年集会及び全校集会の際に体育館で視聴する。

また、視聴時期は、学校行事が終わった翌週に視聴することとする。基本的な流れは、集会の初めに担当の教員の言葉、振り返りムービーの視聴、最後には学年主任等からの言葉を行い、次への教育活動へのつながりを意識付けさせた。

振り返りムービーは「windowsムービーメーカー」と「Adobe Premiere Elements」の2つの編集ソフトを使用して作成する。学校行事での写真や動画とともに音楽に合わせることを基本とする。また学校行事にはよっては内容の工夫を行う。映像編集の教科書¹²⁾を参考として、振り返りムービーの基本的な留意点として以下に示す（表4）。

生徒の反応の観察や生徒の評価から学校行事における振り返りムービーの留意点をまとめ、可能性を検証する。実践内容は「文化的行事、健康安全・体育的行事」、「旅行・集団宿泊的行事」、「儀式的行事」に分類し、学校行事の特性と踏まえて以下に述べる。

表4 振り返りムービーの基本的な留意点

- ・音楽は、生徒が周知あるものを選曲する。また学校行事に合った曲にする。例えば、体育祭はオリンピック応援曲などを使用するなど。

- ・写真は、行事の際に3人から5人の写真を中心に撮影をする。また学級の集合写真を撮影する。1人の写真も使用するが、いじめなど人間関係などを配慮する。また生徒指導上問題があるものに配慮する必要がある。
- ・時間は、全20分程度とする。また写真1枚の表示は視覚的観点から7秒程度を基準とする。
- ・構成は時系列で作成し、簡単なものとする。
- ・内容は、学校行事の特性や時事を生かして工夫する。例えばオープニングとして、教員が出演する生徒の興味を引くものを作成する。

(1) 文化的行事、健康安全・体育的行事

①体育祭

体育祭の振り返りムービーの実践は、第1学年において、2013年9月24日（9学級）に行った。行事の特性としては、中学校で初めて体験する大きな学校行事であり、連帯感を感じる取り組みとする必要がある。日々の練習の成果を生かすことと他集団と対抗して競う学校行事である。

②合唱祭

合唱祭の振り返りムービーの実践は、第1学年において、2013年11月5日（9学級）に行った。行事の特性としては、2学期の後半となり学級でのまとまりが出る頃である。日々の練習の成果を生かすことと他集団と対抗して競う学校行事である。また学年合唱や全校合唱があり集団としての連帯感を感じることができる。

(2) 旅行・集団宿泊的行事

①スキー教室

スキー教室の振り返りムービーの実践は、第1学年において、2014年1月14日（9学級）に行った。行事の特性としては、中学校で初めて体験する宿泊行事であり、1学年と

しての最後の行事である。技能別のグループで講習を受けるため、他学級の生徒とグループとなる。

②修学旅行

修学旅行の振り返りムービーの実践は、第3学年において、2012年6月8日（8学級）に行った。事前学習をしっかりと行い、日本文化に触れる学校行事である。

(3) 儀式的行事

①3年生を送る会

3年生を送る会の振り返りムービーの実践は、第3学年において、2013年3月5日（8学級）に行った。中学校卒業前で生徒が主体的に行う最後の学校行事である。

3. 結果

(1) 文化的行事、健康安全・体育的行事

①体育祭

体育祭は中学校で初めて大きな行事のため学級の写真を多くする意識して振り返りムービーを作成した(図2)。生徒の様子は学校行事の振り返りムービーを初めてで、笑えるシーンでも反応するよりも真剣に見ていた。生徒の感想として、「自分たちが頑張っている様子が見られて嬉しい」という意見があった。



図2 体育祭の振り返りムービーの一部

②合唱祭

合唱祭は、学年合唱や全校合唱な学年や学校としての連帯感を意識して振り返りムービーを作成した(図3)。生徒の様子は、以前か

ら楽しみにしている生徒が多く、2回目ということもあり、楽しみながら視聴していた。生徒の感想として、「当日は、自分が歌うので緊張して見られなかったのですが、よく見ることができた」という意見があった。



図3 合唱祭の振り返りムービーの一部

(2) 旅行・集団宿泊的行事

① スキー教室

スキー教室は中学校で初めての宿泊行事であるため異空間での学習の意義と学年としての連帯感を高めるように意識して振り返りムービーを作成した(図4)。また2日目の夜に宿舎で振り返りムービーを視聴した。生徒の様子は、驚きとともにグループ以外の生徒の活動を見て、学習の大変さを共感していた。翌日のスキー学習への意欲が高まっていた。



図4 振り返りムービー視聴の様子

② 修学旅行

修学旅行は、中学校での学習のまとめであり、事前学習や係活動を生かして、振り返りムービーを作成した(図5)。生徒の様子は、3年生ということ学年での連帯感があり、

全体が楽しみながら視聴していた。写真係の企画で「私の班の竹林」などランキングを付けるなど係活動との関係を持たせた。また行動班での活動の様子を見ることで学習の共有化を意識させた。

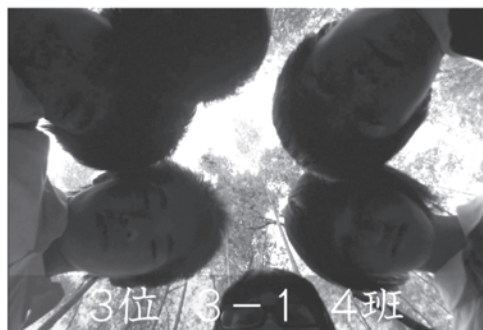


図5 修学旅行の振り返りムービーの一部

(3) 儀式的行事

① 3年生を送る会

3年生を送る会は、中学校で自主的に活動できる最後の行事であり、3年間の変化の様子や教員から思いを意識して振り返りムービーを作成した。1つは、生徒が中心となるもの(図6)、もう一つは教員が中心となり卒業生に対して思いを伝えるもの(図7)、また、教員の印象を生徒のアンケートをもとに作成した。この学校行事は卒業に向けて、学年及び教員が一体となり、中学校においても3年間の教育活動に価値づけする特別な時期である。この時期だからこそ教員がムービーに出演することで生徒への思いを伝えることができる。生徒の様子は、3年の様子を振り返ることで卒業するという意識が高まっていた。また視聴している際に振り返りムービーの終わりに近づくにつれて、涙を流す生徒が多く、終わりを惜しんでいた。生徒の感想として「感動した」という意見が多かった。



図6 3年生を送る会の振り返りムービーの一部



図7 3年生を送る会の振り返りムービーの一部

4. 考察

文化的行事、健康安全・体育的行事においては、他集団と対抗して競うことから学級での連帯感の高まりがあった。旅行・集団宿泊的行事においては、学級だけでなく、学年としての連帯感の高まりがあった。儀式的行事においては、全校が参加しているため、3年間の成長の様子や教員の動画を見ることで1・2学年においても最高学年での卒業のイメージを持つことができていた。

学校行事は、日常ではない小集団サイズで活動するため、仲間集団では起こりにくい意見の違いの理解、トラブルや葛藤の解決が要求される¹³⁾。学校行事の振り返りムービーは、自身の学習活動だけでなく、学級や学年、学校全体として意欲的に活動している生徒が視聴することで、行事に参加した生徒全体が達成

感を味わうことができる。それは生徒自身が学習活動に自ら評価することで次への学習活動への意欲が高まり、自主的な学校行事へ促すことができると考えられる。教員はその価値付けをさせる設定をするなど、学習環境の設定が重要となる。振り返りムービーを楽しむにしている生徒も多く、意欲的に学校行事に参加しようとする姿が見られた。自主的に問題課題を解決しようと取り組むことが期待できる。また、学校行事はその場限りの活動で終わらせるのではなく、事後の学習活動がまとめとなり、次への学習活動へのよいスタートになることが分かった。今回の5つの振り返りムービーから得られた作成及び視聴の際の留意点を表5に示す。

表5 学校行事における振り返りムービーの留意点

- ・学校行事の価値付けを明確にする。
- ・作成する際には、最低一人1回写るようにして集団としての意識を持たせる。
- ・学校行事のまとめとして視聴をする。
- ・次への学校行事や学習への意識を持たせる。
- ・生徒が企画する内容で作成をする。

5. 今後の課題

学校行事の効果は、葛藤の克服・解決を通して生徒たちが成長する¹⁴⁾。学校行事の理想は、「生徒主体教員主導」とされている。ただ教員主導を感じさせない学習環境を設定することでさらに高い効果ができる。今後は振り返りムービーの視聴による生徒の学校行事への意欲の変容や学級・学年などの連帯感の高まりについてのアンケート調査を行う。また、学校行事における振り返りムービーの留意点を実践するとともに、可能性を追求し再検証していきたい。

【文献】

- 1) 中央教育審議会「初等中学校教育における教育課程の基準等の在り方について」, 2015年
- 2) 文部科学省「学習指導要領一部改訂版」, 2015年
- 3) 国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5」, 2013年.
- 4) 楠本町子「アクティブ・ラーニングの教材開発とICTの活用」, 『愛知淑徳大学文学部紀要』, 第10号, 2015年, pp.1~15 (2015)
- 5) 藤本光司・堀木実・沖裕貴「アクティブラーニングに求められる学習成果の測定と活動」, 『日本教育情報学会第30回年会論文集』, pp.18~21(2014)
- 6) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）用語集」, 2012年
- 7) 阿部敬信・神田文聡・新城浩仁「小学校の教育課程における特別活動の意義と課題」, 『別府大学短期大学部紀要』, 第34号, 2015年, pp.21~30
- 8) 織田成和「特別活動に関する現代的考察 - 改訂学習指導要領を根拠として - 」, 『近畿大学工学部紀要』, 第41号, 2011年, pp.39~61
- 9) 河本愛子「中学・高校の学校行事体験の生涯発達の視座からの質的検討 - 大学生の回顧的意味づけに着目して - 」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 54巻, 2015年, pp.241-250
- 10) 戸田浩暢「改訂学習指導要領『特別活動』における『学校行事』の特色」, 『広島女学院大学論集』, 58巻, 2008年, pp.83~96
- 11) 末永ひみ子「特別活動における子どもの自主性を育む教師の役割」, 『工学院大学共通課程研究論叢』, 46巻, 2008年, pp.77~86
- 12) 井上秀明『映像編集の教科書』玄光社, 2007年.
- 13) 樽木靖夫「中学生の仲間集団どうしのつき合い方を援助する学校行事の活用」, 『教育心理学年報』, 第44号, 2005年, pp.156~165
- 14) 廣瀬真琴・矢野裕俊・梶川裕司「自主的な学校行事を通じた生徒の成長に関する事例研究」, 『カリキュラム研究19号』, 2010年, pp.71~83

【謝 辞】

本論文作成につきましては、埼玉県越谷市立大袋中学校飯塚敏雄学校長にご指導とご助言をいただき、深く感謝いたします。

なお本研究の実践授業に関しても越谷市立大袋中学校および栄進中学校の先生方にお世話になりました。特に実践校である越谷市立栄進中学校の猪瀬善広先生には、お忙しい中、多大なご苦勞をおかけしたことと思いますが、常に協力的に実践や研究等のアドバイスをいただき、また調査等にも快くご協力いただき心から感謝申し上げます。